

今なぜNGO（国際民間協力団体）なのか

在日外国人と地域社会

国際協力推進のために

アジア医師連絡協議会 代表 菅波茂

日本の世界における経済的比重が増すにつれて在日外国人の数も増加してきています。在日外国人の方が地域社会で生活することは従来の「親善のための国際交流」を越えた意味合いをもっています。親善は一時的な行事ですが、生活は毎日のことです。日本の地域社会に対する明確な認識がないと在日外国人が毎日の生活を円滑に送ることは容易ではありません。

地域社会での生活を維持するために様々な情報が必要です。その情報が手に入る目に見えない社会システムがあります。具体的に言えば、基本的な生活情報は市町村から町内会をはじめとした各種地域団体を通して家庭に届けられます。従って地域社会で「地域社会の住民」として基本的な生活情報を得るためには各種地域団体活動に参加する義務があります。在日外国人にはこの基本的な生活情報が手に入っていません。各種地域団体活動に参加することは在日外国人と地域社会の日本人との相互理解促進にも重要なことです。町内会、婦人会、子供会、老人クラブ、環境衛生などの活動に在日外国人を積極的に受け入れていく努力が必要です。日本人でも地域各種団体活動に参加しない人はその地域ではさびしい思いをしています。この地域社会システムを在日外国人が自発的に知って参加することはまず不可能です。在日外国人を雇用している企業及び外国人登録を行なっている市町村のレベルで、地域社会と密接な連携のもとに、地域社会の運営システムの説明と参加を勧める事が大切です。

次に地域社会での日常生活に欠かせないのが「住居」、「教育」、「医療」、「交通」、「通信」、「金融」、「買い物」などです。

これらの関係諸機関での表示及び説明を日本語以外の必要な言語対応でするとともに、現場には言語対応できる人あるいは対応できるシステムを確保することがポイントです。

同時に日本人の生活習慣を説明して在日外国人の生活習慣と異なる場合にはその調整を事前にすることがトラブル発生を防ぎます。

以上のことを地域社会で円滑に実行するためには地域社会ごとに「調整員」を養成して配置することが重要です。

市町村レベルで地域社会での調整員の養成と配置を組織的に取り組む事が必要です。

以上の内容を推進するために拠点としての「国際生活情報センター」の設立を提案します。

次に心の健康問題の対策が必要です。

人間は集団で生活すると必ず対人関係上のストレスが生じます。異文化の日本で生活する在日外国人の精神的ストレスは察するに余ります。彼らのストレスは何らかの方法で解決される必要があります。私達日本人と違って在日外国人の母国では宗教の心の健康に対する役割が無視できない程大きいという事実です。仏教、カソリック、プロテスタント、イスラム、ヒンズー、儒教などが代表的な宗教です。彼らの宗教に応じた教会や寺院を積極的に紹介してあげることが大切です。

私達アジア医師連絡協議会は1992年4月から、国際医療情報センターを東京に設立して、在日外国人の医療について電話相談を行なっています。その経験からいいますと、精神的ストレスの治療は日本の精神科医だけでは充分ではありません。まず言葉の問題があります。十分なコミュニケーション無くして心理的な満足感はありません。宗教家の存在が必要です。なぜなら精神科医と宗教家の役割は基本的に異なるからです。精神科医は精神的ストレスの治療は可能ですが「心のやすらぎ」までは提供できません。在日外国人に必要なのは「心のやすらぎ」です。

大胆な提案をいたします。日本の宗教家が協力して、在日外国人の出身国別の主たる宗教家を招聘する、「国際宗教情報センター」を設立することです。この「国際宗教情報センター」を拠点として地域社会における在日外国人の「心のやすらぎ」の問題に積極的に取り組んでいく構想です。

在日外国人を地域社会に受け入れるための「国際生活情報センター」と「国際宗教情報センター」の活動によって得られる貴重な経験、知識、知恵は日本国内外の国際協力を推進する時に重要な役割を果たすと確信します。

在日外国人を地域社会に融和さす媒体として国内外の知識や経験を有する国際民間協力団体の役割があると思います。国際民間協力団体は海外各地で国際協力を推進するために各国の風俗習慣生活に対する理解を深めています。国際協力民間団体が地域ごとにネットワーク志向で海外における個々の知識や経験を集積することにより、在日外国人を地域社会に受け入れるために、更に大きな役割を果たせると思います。

